



目次

基調講演 博物館・美術館の役割	11
実行委員長・日本大学 三輪 嘉六 文化財の保存・継承の特徴 / 伝世品の保存と修復、そして活用 / 『文化財保護法』の改正と博物館・美術館 / 求められる博物館・美術館の機能 / 博物館科学・保存科学の専門家の設置を	
特別講演 保存・修復作業の根底にあるもの	17
京都国立博物館長 中川 久定 博物館・美術館の役割 / 博物館・美術館におけるコレクションとは / 博物館・美術館における保存・修復活動の充実を / 欧米と日本に見る美意識 / モンテスキューと「商業の精神」 / 公共博物館・美術館形成の4形態 / 日本の保存・修復に対する思想の発信	
文化財にも人にも優しい施設を 博物館・美術館の環境づくり	27
東京国立文化財研究所 三浦 定俊 文化財を傷める原因とその対策 / 生物被害への新たな対策・処置 / 「もの」にも「ひと」にも「地球」にも優しい施設を	
信頼できる修復と安心できる輸送 博物館が抱えるリスク	37
東京国立博物館 神庭 信幸 危険をはらむ博物館活動 / 文化財の安全を脅かすもの / 修復と輸送における信頼性と安全性 / 博物館のリスク管理	

「文化財の保存と修復」公開シンポジウム実行委員会
委員長：三輪 嘉六 副委員長：村上 隆
委員：西浦 忠輝、本田 光子、杉山 真紀子、内田 俊秀

捨てられるべきものの保存 **文化を記録する生活文化財** 51

国立民族学博物館 森田 恒之

無作為抽出した資料 / 生活技術の伝承と博物館の役割 /
捨てるためにつくるものと残すためにつくるもの / 使用痕のもつ意味 / 金属製品の保存 /
繊維製品の保存 / おわりに

歴史を見せる **広がる地域博物館の役割** 61

群馬県教育委員会 岡部 央

保存と活用の狭間で / 群馬県立歴史博物館の概要 / 資料を守るために 保存環境の整備 /
虫害対策 / 郷土の歴史を伝えるために 綿貫観音山古墳の展示 / おわりに

民間であるがゆえに **博物館明治村の悩み** 71

(財)博物館明治村 西尾 雅敏

博物館明治村誕生の背景 / 博物館明治村の一日 / 熱心な見学者とは / 来館者をめぐる悪循環 /
文化財建造物保存の本質 / 民間の特性と弱さ / 新しい役割を求めて

パネルディスカッション 85

コーディネーター・奈良国立文化財研究所 村上 隆

文化財とは何か / 社会とともに広がる文化財の概念 / 博物館・美術館の模索 機能の分化 /
新しいサービスの試みと問題点 / 博物館に保存担当者をおくことは可能か /
保存科学担当者の配置を義務づけられるか / 建造物の保存と環境 / 土蔵の環境と博物館の環境 /
日本の伝統的な保存方法とその発信 / プリベンティブコンサーベーションとは /
保存・修復を行う際には共通認識を / 新たな人材の教育・育成制度の確立を /
文化財保存における地域との連帯・教育 / 保存科学・保存修復の教育と博物館 /
保存科学・博物館科学の確立をめざす

総括 **シンポジウムを振り返って** 107

文化財保存修復学会長・武蔵野美術大学 田辺 三郎助

CONTENTS

博物館・美術館の
果たす役割

文化財の
保存と
修復

博物館・美術館の
果たす役割

文化財の
保存と
修復

特別講演



中川 久定
京都国立博物館長

昭和29年京都大学文学部卒業、京都大学大学院文学研究科博士課程中退(昭和51年文学博士)。京都大学文学部教授、パリ第7大学客員教授、パリ国立東洋言語文化研究所客員教授、京都大学文学部長、パリ高等師範学校客員教授を経て、平成9年4月より現職日本学士院会員、日本フランス語フランス文学会副会長
専門はフランス文学・思想史、比較文化史

昭和42年日本フランス語フランス文学会辰野賞、昭和60年フランス共和国パルム・アカデミック勲章、平成5年京都新聞文化賞受賞

著書として、仏文2冊、和文7冊。編著として、仏文3冊、和文4冊。論文として、仏・

作業の根底に
保存・修復
あるもの

私の元来の専門はフランス文学でしたので、美術の保存・修復の問題に関しては素人にすぎません。もちろん、美術館にはずっと関心をもっていました。フランス文学を教えていた頃には何度も外国にいきましたが、その際にはいつも博物館・美術館を訪ねましたし、大学の演習では美術史関係の本をフランス語で読んだりしていました。京都国立博物館に勤めるようになってからは、1ヵ月に1回、館内にある美術品修理所の巡回を行い、1時間半ほど修理現場を見せていただいています。そこでは毎回、口ではいえないほどの大きな感銘をうけています。また、京都国立博物館には保存・修復関係の論文が送られてきますし、修理所の岡墨光堂さんが発行されている『修復』という雑誌にもたくさんの論文が掲載されていますので、よく読ませていただいております。もちろん、それらすべてを理解できているとは思いませんが、愛読させていただいています。本シンポジウムの実行委員会副委員長である村上隆先生や運営委員である杉山真紀子先生の書かれた論文などを拝読して、たくさんのことを学ばせていただきました。そうは申ししましても、実際は素人にすぎませんので、非専門家の観点から見た、という限定つきで保存・修復の問題についてお話をさせていただきます。まず、日本ではあまり話題にされていない本の紹介をさせていただき、その内容を手がかりにしながら話を進めることにします。

博物館・美術館の役割

博物館・美術館の重要な役割のひとつは、いうまでもなく文化財の展示であります。しかしまず、何をもって文化財というかが問題となるであります。例えば、本シンポジウムで国立民族学博物館の森田恒之先生が提唱された「生活文化財」と名づけられているものがあります。昔、日常的に使っていた、日常生活に必要な器財という意味での文化財であります。この生活文化財との対比で、「美術文化財」*とでも名づけられる美術品があります。私ども京都国立博物館の主な展示品はこの美術文化財*ですが、そのほかに「歴史文化財」と称すべきものも展示されています。美術的な価値は特になくても歴史的な意味をもっているものであれば立派な歴史文化財になりうるのです。このようにひと口に文化財といっても、美術文化財と生活文化財、あるいは歴史文化財といろいろあるわけですが、博物館・美術館は、まずこうした各種の文化財を展示する施設として成り立っています。ただし、展示する際に、でたらめに並べて

* : p.51 ~ 60 参照



京都国立博物館に展示されている「美術文化財」鎌倉時代の仏像

おけばよいというわけのものではありません。並べているものがひとつのまとまりをなしている必要があります。まとまりをなしているということを別の言葉にいかえると、コレクションを形成している、ということです。

博物館・美術館におけるコレクションとは

話の手がかりとなる本を紹介させていただきます。日本語訳の題名は『コレクション』（吉田城・吉田典子訳、平凡社、1992年刊）です。この本は、博物館・美術館関係者の間ではほとんどとりあげられていませんが、博物館・美術館の役割を考えるうえでたいへん参考になるものです。1987年にフランス語で出版されました（正確な原題は『収集家、愛好家、好事家』）。著者はフランスの国立科学研究センター教授、ポーランド出身のクシトフ・ポミアンです。彼は博物館・美術館で展示されるコレクションを、次の3つの特徴によって定義しています。

第1は、営利活動の経路の外におかれているということです。現在、われわれの社会は資本主義体制をとっていますから、すべてのものを売ることができます。例えば、あるフランスの画商がピカソの若い頃の作品をたくさん集めていたとしましょう。それらは博物館・美術館でいう意味でのコレクションではありません。それらの作品は営業用だからです。すぐに資本主義の営利活動の経路によって売られてしまいます。ポミアンのいうコレクションとは根本的に性格が違っています。一時的にせよ永久的にせよ、営利活動の外におか